随筆

随想 —思いつくままに—*

日置 進**

An essay*

by HIOKI Susumu**

キーワード マイクロ接合, 海外旅行, 秋田, 芭蕉, お酒

1. はじめに

学会誌の編集者から随想の執筆依頼があった時、少し戸惑いを感じた。何か特筆的な思い出話とか、趣味とか、業績があれば、簡単に書けるのですが、特別なこともなくただ齢を重ねてきた者にとっては大変な事だと感じたからである。しかし、ほぼ人生の4分の3を過ごしてきた中での出来事を、適当に織り交ぜれば責を果たすことになると考えてPCに向かった。

何はともあれ、これまでの人生で多くの方々のご指導とご支援を頂いた事に感謝と御迷惑をお掛けした方々に陳謝申し上げたい。

2. マイクロ接合のことなど

大学では、大学院と助手時代に溶接継手の疲労と破壊力学の適用に関する研究を続けて1970年に何とか学位論文を仕上げた。その時点で、大学での研究者生活を続けるよりは、大学での基礎研究が企業の現場でどの程度の価値があるかを考えてみたいと、ある会社の機械の研究所の話があったのを期に、前後の見境もなく飛び込んだ。入社当初は破壊力学の応用的な仕事をしていましたが、企業の研究では、多くの分野の成果を結びつけて製品に仕上げるのが重要であった。当時は、重厚長大が全盛であったが、研究としてはある程度先が見えてきた頃であったこ

ともあって、新しい成長分野、半導体製品に熱・力学的解析の観点からアプローチすることに携わる事となった。当該分野では、溶接の分野からは古くから半田付けの技術が関係していたが、解析的な観点からの生産性の改善や信頼性の評価、寿命予測などに関しては殆どなかった。研究を進めて行く内に、同じ分野で仕事をしている研究者との情報交換をする場を作りたいと考え研究委員会の発足を提案したところ、同じ思いを持つ研究者が多く、熱・力学的解析の分野だけでなく材料、機器、設計、規格関係などの分野の優秀な研究開発に携わる者が集まり、忽ち組織、マイクロ接合研究委員会、が立ち上がり、今日の隆盛に繋がっている。発足当時の委員長、幹事や委員の方々の努力の賜物と考えている。

3. 海外旅行

最初に海外に出かけたのは早く、1963年のことであった。学生の頃から登山にのめり込んでいて、当時は多くの方がヒマラヤに熱を上げていた時代であり、私もその内の一人であった。大学院での研究を一時脇において、先生に叱られながらもインドを経て、ネパールヒマラヤに半年ほど出かけ、7000m近いピークに立つことが出来た。その後、会社での研究成果を発表する機会を数回得て、米国、カナダ、英国、ドイツ、スイス、イタリアなどのヨーロッパ諸国とソ連（現ロシア）、その後の秋田県立大学時代には、中国、韓国などにも足を運んだ。個人的にはギリシャ、カナダなどである。それぞれのお国柄の良い面では楽しんだが、日本を含めて、こすっからい面もあることは諸兄弟のご承知の通りである。特

*原稿受付 平成22年3月18日

**正員 HPO E-TECH, (秋田県立大学名誉教授) Member, NPO E-TECH, Professor emeritus of Akita Pref. Univ.

に、空港の免税店で買ったスコッチが紛い物であったのは、その国の名誉に関わることと残念な思いもした。

4. お酒と、秋田のことなど

秋田に新しい公立大学、秋田県立大学が発足するに当たり教員を公募されると聞いたのは、1997年のことで、丁度会社の定年を迎える頃だった。企業の研究所で過ごした経験を生かして、学生の就職後を想定した教育をやりたいと考えていた矢先だったので、設立趣旨に新しいコンセプトのもとに設立するということもあり応募してみたところ、幸いなことに採用が決まり、赴任することになった。担当したのは機械の設計の研究室で、赴任当初機械の設計教育のための教科書作りから始め、『現代機械設計学』（内田老鶴圃）を多くの方に共同執筆をお願いして上梓することが出来た。また、大学の目標の一つに地域への貢献が大きな柱でもあった事もあり、秋田での新しい産業の創設を考えた。その一つに、日本海の200m以深にある固有深層水（大循環の海洋深層水と区別されている）を利用する事を、2000年秋の高知での溶接学会の室戸岬での海洋深層水活用に関する特別講演聴講をきっかけに手掛けてみた。その利用の一つに秋田の酒造会社と共同で、お酒作りをやってみたところ、成分のMgが発酵を促すようで、大変美味なお酒の試作に成功した。しかし、深層水の総合的な事業化には20億円近くの資金が必要だと聞いた秋田県内の業者はなかなか乗って来なかった。また、秋田は森林県でもあり、秋田杉（DNA的には一般的な杉）の間伐材を使ってバイオエタノールの製造を秋田県食品研究所の発酵の研究者と共同で開発してみた。製造効率も抜群に良いのだが、事業化のきっかけは中々掴めずにいる。これは私の退職後の現在も継続して開発が進められている。

ところで、秋田ですぐに思い当たるのは、俳聖松尾芭蕉が奥の細道で到達した最北地の象潟がある。『象潟や 雨に西施が 合飲の花』という句が浮かび上がる。秋田に入るに、いろんなルートがあるが、赴任は4月なので、空路をとった。芭蕉のとした山形からの徒歩は夏であった事もあり、彼と同じ時期に山形の吹浦から炎天下を歩いてみた。芭蕉は舗装もなく車も走ってない穏やかな羽後路を静かに

図1 鳥海山で楽しむスノーモービル

辿ったのであろう。芭蕉にならって、一句
独り行く 北の細道 ともは合飲 羽州

さて、秋田は酒どころ。日本海を西に控えた酒菜どころでもある。私は若い頃から、少し嗜んできたが、スコッチ、ワイン、日本酒 等々、銘柄を当てるほどの舌の持ち合わせはないが、美味しいもの、気に入ったものの見分けがつく程度の味覚は持っている。スコッチはモルトウイスキーが手頃であるが、バランタインの30年ものは大抵の人がストレートでも飲めるものだし、ワインはボルドーやブルゴーニュも良いけれど、今はスーパートスカーナに填っている。日本酒は秋田の本荘にある酒蔵の「しほりたて」が好みで、毎年暮れのしほり始める時期に合わせて送らせている。年により出来不出来があるのが面白く楽しんでいる。また、秋田は雪国で、車で1時間以内に適当なスキー場が多くあり、そのために四駆のジープタイプの車を手に入れ良く通った。それに、スノーモービル、雪原の暴走族よろしく爆音を響かせて無人の鳥海山の麓を走り回った。今しか出来ないこと。

5. おわりに

私の人生は、特別な目標を立ててそれに邁進するというものでなかったが、周期的にある時期に次のステップに踏み出す時、それに見合うだけの業績というか、実績みたいなものを積み重ねていたこと

が、身を助けたようである。さて、残りの人生は、1クォーター。ゲームでの残りのクォーターは勝負が掛かっているものであるが、人生の残りのクォーターは波風のない静かなものになりたいと思うものである。ところが、そのクォーターのはじめに、大学が独立法人になった事もあるって、若手の教授の先生方がとてつもなく忙しくなり、秋田での仕事も終わ

りに近づいていた私に、マイクロの委員長という重荷を背負わされる事になった。これも、若い先生方や企業の優秀な方々のサポートもあって、何とか凌ぎきったようである。これからは静かな暮らしに入れるのだろうか。否否、何かをやってないと落ち着かない性格からして、どうだろうか？